

基礎学力の向上を目指した授業の試案的取り組み —実習記録及び指導案を作成するために—

柴 田 智 世

1. 研究の目的

学生にとって、実習において毎日記入する実習記録や、指導案の作成が、一番の不安であることが、先行研究から明らかになっている¹⁾。

事前準備として、学内の授業で実習記録の書き方等を学ぶが、学生はそれらを即、実習で実践していかなければならないという課題を抱えている。実習記録や指導案には、単に保育中に起きた出来事をそのまま記述するだけでなく、保育者の行動の意図や配慮を読み取るという、豊かな文章表現力が求められているといっても過言ではないであろう。

一方で、学内での学生の様子を見ると、適切な文章表現が未熟な者、文章を書くことに劣等感をもっている者、インターネットの普及による文章を書く機会の減少など、学生をとりまく環境の変化とともに、こうした実態をふまえた指導がより必要になっている。

また、実習記録や実習指導案の書き方に関する書籍は多く出されているが、それをそのまま全ての学生に適用することが効果的とは必ずしも限らない。よって、教員が学生の実態やニーズに合わせた方法で、教授していくことが求められている。

そこで、本研究では、実習記録や実習指導案の書き方を学生に教授していく方法を整理することによって、学生がそれらを効果的に習得することができるようにしたいと考えた。

2. 先行研究から見えてくるもの

岸本裕史によれば、「学年名×10分の読み書き計算の学習に、毎日きちんと取り組ませることで、高学力になる基礎が築かれる」²⁾「漢字・漢語というものは、子どもの学力の高低や優劣をはっきり分けてしまう指標でもある」³⁾ことや、概念語・抽象語の習得が大切であると述べている。

また、岸本は視写や、聴写の有効性についても触れ、書く力を身に付ける上で、書き写すことや、

聞き写すことが効果的であると述べている。

こうした研究をふまえて、本来は義務教育で学ぶ漢字の習得や、視写、聴写の能力を、学習の基礎に据えることにより、学生が実習記録、実習指導案を書く力へと導いていくことが効果的ではないか、と筆者は考えた。

3. 研究の方法

筆者の担当する授業「カリキュラム研究」(幼稚園免許・保育士資格取得のためには必修科目、2年次前期開講)を受講している、愛知県内A短期大学幼児教育学科2年生124名を対象とする。

また、抽出学生として、この中から4名を選び、それぞれの学生が書いた、実習記録と実習指導案を分析し、本授業を受ける前と後の学生の変容を明らかにする。

以上のことから本研究では、本授業内での取り組み内容及び実践を整理し、学生たちが実習記録や実習指導案を書く力をどのように身に付けていったのかについて報告する。

4. 結果と考察

表1は、授業内でどのような取り組みや指導を行ったのかを、一覧にまとめたものである。

(1) 基礎学力の定着のための取り組み

本学の学生は、毎年、実習園から誤字が多いと指摘されることが多い。学生に対しては、実習時に必ず国語辞典を持参し、分からない文字や不明瞭な文字については調べるようにと指導していたのだが、残念ながら改善がほとんど見られなかった。

また、散見した限りではあるが、多くがおそらくこれまでの義務教育において、文章を読む、書くなどの学習の基礎基本が身に付いていない者、日頃の授業態度を見ても、勉強の習慣がほとんどない者も多い。そうした学生の実態から、まずは

表1 授業内での取り組みと指導

<p>基礎学力の定着</p> <p>① 漢字の練習問題を行う</p> <p>② 口頭筆記によるノート記入</p>	<p>【授業目標】</p> <p>① 漢字の力を身に付ける</p> <p>② 口頭筆記による筆記能力の習得</p>
<p>【授業内容及び学生への指導・教授内容】</p> <p>① 漢字の練習問題…これは、実習記録、実習指導案を書く際に、実習園より「誤字・脱字が多い」との指摘を受けることがあることから、授業内で漢字の力を身に付けるための取り組みである。幼稚園教育要領、保育所保育指針でよく用いられる漢字と、学生が1年次の実習の際に、実習記録で間違えた漢字を取り上げ、問題とした。方法としては、毎回の授業の最初に、各20問の漢字練習を行う。回答後、模範解答を配布し各自で採点を行った。第8回目、15回目の授業で、各20問の漢字テストを実施した。回答後は回収して筆者が採点を行った。</p> <p>② 口頭筆記…毎時間の授業において、筆者が言った50～100字程度の文章を学生が聞き取り、ノートに書き取る。耳で言葉を聞き取り、記述する力や集中力を養うことを目的として行った。</p> <p>【考察】</p> <p>① 漢字の練習問題…保育の専門用語や、日常生活であまり使用しない語句については、正解率が低かった。しかし、毎時間の授業前に行うことにより、授業のリズムができていったと思われる。</p> <p>② 口頭筆記…学生は、授業中に私語の多い者が急に静かになり、聞き漏らさずに書き取ろうという姿が見られたため、学生の学習意欲は大変伝わってきた。しかし、本研究では、能力がどの程度身に付いたのかどうかまで言及することが難しい。</p>	

<p>ステップ1</p> <p>実習記録の見本を模写する</p>	<p>【授業目標】</p> <p>教科書（テキスト、参考文献を含む）に記載されている実習記録のサンプルを分析し、理解しながら模写することができる</p>
<p>【授業内容及び学生への指導・教授内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習中に実習記録を毎日書く意義について説明する。 ・模写の前に、筆者から、実習記録の言葉遣いや言い回しを一つひとつ理解できるように説明をする。 ・見本の実習記録に、意図的に不適切な表現を混ぜておき、学生にどの個所が不適切なのかを考えさせた上で、適切な表現の仕方に訂正させる。 ・「ねらい」の意味を理解し、それらが保育とどのような関連をもっているのかについて理解する。 ・「環境構成」欄は、可能な限り図で示し、直線部分は定規を使って丁寧に書くよう指示する。 ・見本の模写がひと通りできたら、2回目の模写では「環境構成」、「実習生の援助・配慮」欄を空白にしておき、学生が自ら考え自分の言葉で記述できるような、ワーク的な活動を取り入れる。 ・「実習生の援助・配慮」欄では、園によっては好ましくないという表記の仕方があるため、それらについて取り扱う。その際、別の書き方で表現するようにと指示する。 <p>例）子どもに対し実習生が「～させる」や「～してあげる」は使わない、台詞のように「 」を使用して書かないことなど</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習記録では、「気づき」の欄を設け、学生自身が学んだこと、考えたこと、考察したことなどを記入するようにと指示する。 	

【考察】

- 学生の意見としては、授業の中で様々な種類の実習記録や、指導案の書式を学びたいという意見も聞かれた。理由としては、1年次の実習において、園側から園の所定の書式を採用するようと言われてたからである。しかしながら、学生の実態やレベルを考慮すると、限られた授業内で全員にそれらを教授することは大変厳しい。そのため、授業ではいくつかの書式を印刷したものを学生に配布し、説明することに留まった。本授業としては、学校が指定している実習記録、指導案の書式を中心に学びを深めていくことについても学生に説明し、科目担当者側の意図を理解をしてもらった。なお、園の書式で書く練習もしておきたいという意欲のある学生には、個別に指導することにした。

ステップ 2

部分指導案の作成

(1)

【授業目標】

一日の保育の、生活の一部についての指導案を作成することができる

【授業内容及び学生への指導・教授内容】

- 「朝の集まりの時間」「おやつ時間」「給食の時間」「帰りの集まりの時間」のように、生活の一部について、それぞれ指導案を立てる。

【考察】

- 指導案の作成ではあるが、実習記録と共通する箇所が多いため、学生にとっては比較的作成しやすいと思われる。
- 完成した部分指導案は、回収し筆者が毎回、添削を行い学生に返却した。優れている点と改善点について明確にし、学生に指導した。

ステップ 3

部分指導案の作成

(2)

【授業目標】

半日実習案を作成することができる

【授業内容及び学生への指導・教授内容】

- 午前と午後の保育を、それぞれについて半日指導案を作成する。
- 学生には、自分がここで担任の先生になったと仮定して、保育を行うことを伝えた上で指導案を書くようにと指導する。
- 「環境構成」欄は、単に教材や道具類、保育に必要な物が物質として存在しているのではなく、実習生がどのような意図や願いをもって、それらを準備しようとしているのかについても、指導案内に記入をする必要はないにしても、自分なりの考えをもつことが大切であることについてもふれる。
- 学生は、「子どもの活動」が表面的にしか捉えることができない者や、理想的な子どもの姿に特化した記述をしてしまう者が多い。そのため、“子どものあるべき姿”ではなく、子どもの予想される姿を多く想定するようにと指導する。ここでは、保育内で起こりうるであろう子ども同士のトラブルや、いざこざ、学生にとって保育が計画通り進まない場面をを学生にできるだけ考えさせ、その場合どのように実習生として援助や配慮をするのか記述するよう指示する。
- 先ほどのステップ 1 においても示したが、「実習生の援助・配慮」欄で学生は、自身が子どもに対して話す言葉を台詞のように、「」を使用したいと望む者が多い。学生にとっては、その方が書きやすいからであり、子どもを前にした時に、自分が何を話したらよいかということが先行する気持ちも、大いに理解できる。そのため、場合によっては、必要であれば台詞を記述することもありうるが、それらは最小限に留めるようにと、指導する。

【考察】

- 学生は自身のメモとして、自分が話そうとする台詞については、「 」を使用して、指導案とは別の用紙を用いて、記述したものを備えておいてもよい、ということを示した。それにより、学生が子どもの前で何を話せばよいのか、という不安を和らげる効果があることが分かった。
- 完成した部分指導案は、回収し筆者が毎回、添削を行い学生に返却した。優れている点と改善点について明確にし、学生に指導した。

<p>ステップ4 全日実習指導案の作成</p>	<p>【授業目標】 全日実習案を作成することができる</p>
<p>【授業内容及び学生への指導・教授内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 丸一日の保育を、自分が担任の先生になったと仮定して、保育を行うことを伝えた上で、指導案を書くように伝える。 • ステップ3とおおむね同じことを、学生に指導する。 • 指導案を作成するにあたっては、その日の保育だけが単独にならないようにするとともに、前日までの子どもの姿や遊びの様子を視野に入れて、生活の流れをおさえることが大切であると伝える。 • 週案、月間指導計画など、様々な指導計画との関連についても触れる。 • 設定保育の部分については、次のステップ5で詳しく取り扱うため、今回に限っては大まかな計画を立てる程度（設定保育の活動内容、所要時間等を押さえておく）とする。 <p>【考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 完成した部分指導案は、回収し筆者が毎回、添削を行い学生に返却した。優れている点と改善点について明確にし、学生に指導した。 • 完成度の高い学生の部分指導案を、受講学生全員に配布し解説を行った。 	

<p>ステップ5 設定保育の指導案の見本を模写する</p>	<p>【授業目標】 教科書（テキスト、参考文献を含む）に記載されている指導案のサンプルを分析し、模写することができる</p>
<p>【授業内容及び学生への指導・教授内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 指導案の見本を学生に配布し、気づいたことや考えたことなどを中心に、自由に発表させる。その発表の内容を受けて、筆者より指導案の具体的な中身や、ポイントを説明する。 • 指導案の見本を、模写する。その際、単に見本に忠実に写すだけでなく、言葉の記述の仕方に着目して、意味を考えながら行うように指導する。 • 模写用の指導案（1種類）、参考資料用の指導案（4～5種類）を配布し、それぞれについて説明する。 <p>【考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学生の中には、なぜ指導案を模写するのか、これらの手間のかかることをなぜ行うのかについての教員側の意図を知ることによって、本作業の目標を理解することができる。その意図としては、書くことによって指導案の中身を理解し、記述の表現の仕方を体得していくことに繋がる、と説明する。目で読むだけでなく手を動かして記述することによって、自分の力になるという点についても伝える。それにより、学生も意欲を持って取り組むことができると思われる。しかしながら、残念なことに、これらの説明を聞きもらした者（あるいは、聞いたが忘れてしまった者）が数名おり、最終回の授業で記入した振り返りの感想用紙に、「指導案を写すのは無駄だと思う」と書かれたものがあった。 	

- しかしながら、筆者の意図である、指導案を模写する意義を理解できた学生はあまり多くないと散見されたため、極端な事例を用いて話をすることも試みた。その例としては、仮に学生が白紙を渡されて、指導案を立てるようにと課題が出された場合、あなたはどのようにやって指導案を立てるのか、用紙を目の前にして手が止まってしまうであろうと想像させる。よって、見本の優れている点を真似をしながら自分に取り入れていくことが、結果として指導案独自に使われている言葉遣いや表現方法を学ぶことに繋がるのだと説明する。
- これらの指導の経緯より、指導案の模写をする理由について学生に分かりやすく説明することが、学生の動機づけにも大きく影響すると思われる。

ステップ 6 設定保育の指導案の作成	【授業目標】 設定保育の指導案を作成することができる
【授業内容及び学生への指導・教授内容】 <ul style="list-style-type: none"> • 学生は、乳児（0～2歳児）対象と、幼児（3～5歳児）対象の指導案をそれぞれ1種類ずつ、合計2種類の指導案を授業内で作成する。この際、学生自身が実習で行うことを想定して作成するよう指示することにより、学生の意欲向上に繋がると考えた。 • 設定保育でどのような教材を取り上げたらよいのか悩んでいる学生には、これまでに受講した保育実技系の授業内容を思い出させ、その中から、子どもと一緒にやってみたい活動を取り上げるように助言した。 • 学生の中には、「自分は4歳児の担当をすることに決まっているが、4歳の今の季節だとどのような活動がふさわしいか？」というように、一定の模範解答を期待する質問をする者もいた。そのような場合には、まず自身が子どもたちとやってみたい活動を考え、保育の流れを組み立てた上で相談にできるように、と指導した。 • 設定保育では、学生は失敗を恐れるあまりに、ともすると、その遊びや活動を実現すること自体が目的になってしまう恐れがある。そのため、指導案の作成や準備を綿密に行った上で、実際の保育がどのような結果になろうとも、その結果から反省点を見つけ、活かしていくことが大切であるため、失敗は気にせずに思いきり取り組んでよいと指導した。 【考察】 <ul style="list-style-type: none"> • 完成した部分指導案は、回収し筆者が毎回、添削を行い学生に返却した。優れている点と改善点について明確にし、学生に指導した。 • 意欲の高い学生は、授業時間外にも自ら指導案を立て、添削の依頼に来た者もいる。 • 実習目前にならないとやる気が湧かないのであろうか、多くの学生は実習開始直前に駆け込みで指導案の添削や設定保育の内容について相談に来た者もいる。 	

表2 抽出学生の変容について

【事例1】 A子の実習記録の分析		
実習記録の項目	保育所実習Ⅰ（1年次）	保育所実習Ⅱ（2年次）
① 動 子どもの活	<ul style="list-style-type: none"> 遊びについての具体的な記述がない。 生活面についても、同様に具体的な記述がない。「片づけ」「食事」「おやつ」と箇条書きであり、子どもの活動を表面的な視点でしか捉えることができていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもがどのように遊んでいたのかを、具体的に記述できるようになった。
② 助・活動 実習生の援	<ul style="list-style-type: none"> ①～③の中では、この欄は文章量が多く書くことができていない。 子どもの遊びに対して、どのような援助をしたのかが書かれておらず、書き方が拙い。 	<ul style="list-style-type: none"> 日によっては、書くことができていないが、そうでない時も多く見られ、文章量も少なく、文字が雑であった。保育者からも、丁寧に書くようにと指導を受けた様子が見られる。
③ 環境構成	<ul style="list-style-type: none"> 本欄に、実習生の行動（掃除の内容）を箇条書きで記入している。本欄を狭い意味で掃除などで園を整える程度としての環境構成と捉えているようである。 図を用いての記述がない。 	<ul style="list-style-type: none"> 日によって、詳細に書かれている日と、おおまかに書かれている日との差が大きい。 保育室内の環境構成については、大変丁寧に書かれている日も見られる。 本欄と「②実習生の援助・活動」欄を混乱して記入している日もある。
④ 考察欄 一日の反省	<ul style="list-style-type: none"> 子どもとの関わりのなかで、うまくいかなかったことや、反省点について書かれている。 	<ul style="list-style-type: none"> 1日の保育の具体的な場面を抜き出して、どのような子どもの姿があり、自分がどう関わったのか、子どもから自分が学んだことについて書くことができるようになった。
本学生の課題	<ul style="list-style-type: none"> 「環境構成」についての理解が不十分だとされるため、指導が必要である。 全体的に、本学生が保育を見たままの様子を箇条書きで書いている。よって、実習生や保育者の活動が、どのような意図をもって行われたのかというところまで観察する力は育っていないと思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「ねらい」の書き方が理解できていないのか、何も書かず空欄にしている日が多い。 園からも、記入するようにとの指導あり。 日によって、記述量に差があるものの、全体的に見ると保育所実習Ⅱでは、Ⅰと比べると、内容に深みが見られる。

【事例 2】 B 子の実習記録の分析		
実習記録の項目	保育所実習 I (1 年次)	保育所実習 II (2 年次)
① 動 子どもの活	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの姿の記述が、実際の子どもの姿とは異なっているということを、担任保育者から指摘されて赤ペンが入っている。子どもの姿を部分的にしか捉えることができていないようである。 	<ul style="list-style-type: none"> 保育所実習 I と比較すると、子どもの様々な姿を捉えて記述されていることは評価したい。
② 助・活動 実習生の援	<ul style="list-style-type: none"> B 子は、本欄を記入する際、「保育士」と「実習生」を分けて記述している点は評価したい。保育士の援助や配慮が、どのような意図で行われたのかについては、書かれていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 本欄には、自身の援助や留意点について書いている。保育者からは、不足しているところを補ってもらっている。
③ 環境構成	<ul style="list-style-type: none"> 図の直線を書く際に、授業では定規を用いるように指導していたが、使用せずに書いている。 本欄に、②で書くべき内容が記述されており、保育者に指摘されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 保育所実習 I と同様に、定規を用いずに書いている。 本欄に、①、②で書くべき内容が記述されており、保育者に指摘されている。 なぜそのような環境構成の配慮がなされているのかについての記述はなく、本学生が保育を見たままの内容であり、環境構成のありようについて記述が乏しい。
④ 考察欄 一日の反省・	<ul style="list-style-type: none"> 誤字・脱字が見られる。 一日の出来事が中心で、保育をして自分自身が考察したことや学んだことについては記述されていない。保育者からも「日記ではないため、第三者が読むことを念頭においてほしい」とコメントあり。 	<ul style="list-style-type: none"> 誤字が多く、保育者からも指導されている。 一日の出来事で、印象に残ったことをいくつか書いているが、子どもの考察の踏み込んだ内容にまでは至っていない。もう少し、自身が成長する反省・考察となってほしいと願う。
本学生の課題	<ul style="list-style-type: none"> 助詞の使い方を保育者から訂正されている。 文字をきれいに訂正せずに、黒ペンで塗りつぶしている。保育者からの指摘あり。 ①～④以外に、自分で「気づき・考察」欄を設けて記入している点は評価したい。 子どもの在籍・出席・欠席人数欄が空欄になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体的な記述の量は、I と比べると増えている。しかし、誤字・脱字が多く文字も雑である。添削する側にとっては、大変読みづらい文字である。

【事例3】C子の実習記録の分析		
実習記録の項目	保育所実習Ⅰ（1年次）	保育所実習Ⅱ（2年次）
① 子どもの活動	<ul style="list-style-type: none"> 給食を食べ終わった以降の、子どもの活動が一切記述されておらず、保育者から補足されている。（実習記録そのものが、半日分しか書くことができていない。） 	<ul style="list-style-type: none"> Ⅰと比べると、子どもの活動を細かく記述することができている。記録が、本人の都合上、途中から書かなくなるということはなかった。
② 助・実習生の活動	<ul style="list-style-type: none"> 実習生と保育者の援助・活動をそれぞれ分けて書こうとしているが、書かれている内容が断片的であり、部分的な記述に留まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> Ⅰと同様に実習生と保育者の援助・活動を分けて書いている。Ⅰと比較すると細かく状況を捉えることが出来ており、進歩が見られる。実習が進むにつれて、日毎に書く量が増えてきている。
③ 環境構成	<ul style="list-style-type: none"> 自分がどのような準備を行ったのかについての記述は見られるが、保育者がどのような配慮をして環境を構成しているのかまでは触れられておらず、保育者から細部にわたって補足されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 初日のみ、図を用いて記入していた。2日目以降は全て文章で記述している。準備物を中心に、用意した物を書いている。
④ 欄 一日の反省・考察	<ul style="list-style-type: none"> 文章表現力が拙いためか、本欄に書かれていることが大変未熟であると思われる。1日の保育を振り返って、書く話題も、文章量も不十分であり、実習生としてのやる気が伝わらない。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日、自分が立てた目標に対して、一日を振り返っての反省等が書かれている。その点は自分の保育を考察する視点をもっていると思われる。 文章を記述する能力に限界があるのか、与えられた紙面を十分に使うことができず、余白が目立った。
本学生の課題	<ul style="list-style-type: none"> 実習記録自体が半日分しか書けておらず、未完成のまま提出した日が見られる。 誤字が多く、保育者から訂正されている。 自分で「実習生の気づき・考察」欄を設けていることは評価するが、記述内容が少なく保育者からの指導を受けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「実習生の気づき・考察」欄を設けている。Ⅰの時の比べると、記述する量が増えている。 誤字が多く、保育者から訂正されている点が多い。 Ⅰで見られたような、実習記録が未完成の状態での提出された日はなかった。

【事例 4】D 子の実習記録の分析		
実習記録の項目	保育所実習Ⅰ（1年次）	保育所実習Ⅱ（2年次）
① 子どもの活動	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの活動を、子どもの発話を捉えて「 」を用いて台詞のように記述している。このようなケースは筆者もこれまでに出会ったことがないため、事後指導に悩んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> Iの時のように、子どもの発話を「 」で台詞のように記述することは全くなかった。 場面ごとに子どもの活動を捉えて、丁寧に書いている。
② 実習生の援助・活動	<ul style="list-style-type: none"> 実習生の援助や行動を、文章で表さず、「 」を用いて、自分が子どもに対して何を話したのか台詞を並べている。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習生の援助・活動と保育者のそれとを分けて文章で書いている。Iの時に見られたような「 」での記述は見られない。
③ 環境構成	<ul style="list-style-type: none"> 図を用いて書いているが、定規を使っていないため、雑な印象である。 	<ul style="list-style-type: none"> 園の指導が入ったのでであろうと思われるが、実習3日目から環境構成、実習生の援助・活動を同じ欄にまとめて、それぞれを記号を付けて分類し、分かるように示していた。
④ 省・一日の反省	<ul style="list-style-type: none"> 子どもとの関わりによって、自分が何を学んだのかについては、保育の場面を思い起こしながら具体的に記述することができている。この点は評価したい。 	<ul style="list-style-type: none"> 保育の中で、特に子どもとの関わりで学んだことや、疑問に思ったことを自分なりに考察していた。このことから、今日の反省を翌日の保育に活かそうという前向きな意欲が感じられる。
本学生の課題	<ul style="list-style-type: none"> 全般的に見て、実習記録とは呼べず、一日の出来事をメモにしたものを、実習記録用紙にそのまま転載したようなものであった。 	<ul style="list-style-type: none"> Iと比べると、実習記録としての中身が充実していると思われた。この2週間で、部分実習を5日も経験した様子で、指導案が綴られていることから、本人の成長が伺われる。

基礎学力の向上を目指した授業の試案的取り組み

表3 抽出学生の作成した部分指導案の分析（保育所実習Ⅱ、2年次のもの）

学生名	部分指導案の特徴と分析
A子	<p><実習10日目に、製作（壁面用の魚作り）の指導案を作成> ねらいは、活動と子どもの姿を見通したものが書けている。時間欄が全く書かれていない以外は、その他の欄については詳細にわたって記述されている。 環境構成は、子どもの人数を考慮し、準備物が細かく書かれている。また、図を用いた保育室内図、壁面のイメージ図、製作物である魚の図、子ども用机の上の材料の並べ方まで、大変丁寧である。 予想される子どもの活動は、実習生の思い通りの子どもの姿だけでなく、個人的に援助の必要な子どもの姿が踏まえている。 実習生の配慮・援助欄では、部分的に、「 」を使った台詞が見られるものの、予想される子どもの活動を見通した配慮・援助が書かれている。</p>
B子	<p><実習7日目に、製作活動（貝殻作り）の指導案を作成> ねらいは、製作の技術面における記述があるものの、この活動の面白さに着目したねらいではない。この点については、園の先生から、訂正を受けている。 環境構成は、折り紙の折り方の手順を書いているが、保育室の配置図については書かれていない。準備物も、おおまかに書かれており、大雑把な記述である。 子どもの様子は、全てが「～している子どももいる」という一辺倒な書き方であることから、言語表現力の未熟さを感じた。 保育者の配慮・援助欄では、「 」を使った台詞での記述は極力避け、文章で記述されている。本人の性分なのであろうが、文字が雑なため、指導案全体に丁寧さが感じられない。その後で、園の先生から清書するように指導があり、清書の方は、最初と比べると若干文字が丁寧と思われる。 <実習9日目に、集団遊び（ハンカチ鬼）の指導案を作成> 環境構成は、図を使って書いているが、実習生の立ち位置が書かれておらず、不備な面が見られる。予想される子どもの様子は、7日目に書いた物と比べると語尾の変化が見られる。 保育者の配慮・援助では、「 」を使った台詞での記述を避けるように、配慮・援助については、細かく記述するようにとの園からの指導があった。</p>
C子	<p><実習9日目に、製作活動（パッチンカエル作り）の指導案を作成> ねらいは、製作面については書かれているが、出来上がった物で遊ぶ点については書かれていない。「前日までに自分が準備しておくこと」を先に記入しているのは、分かりやすく、用意する物の個数を記入するなど、下準備をしっかりと行ったであろうと思われる。 実習生の配慮・援助欄では、自分が子どもたちを前にした際に、何を話そうかという点が一番気になるのであろうか、「 」を使った台詞での記入が多く見られた。この点については、本学生の文章能力の未熟さが見て取れたため、学内の指導が必要であると思われた。</p>
D子	<p><実習4日目に、「手遊び、絵本」の指導案を作成> 書き方が分からないのか、大変簡潔な指導案であり、環境構成が全く書かれていない。担任の先生からかなり補足してもらっていた。 <実習5日目に、「手遊び、絵本」の指導案を作成> 前回に作成したものと比べると、予想される子どもの活動や、保育者の援助・配慮の欄に言葉が増え、環境構成も押さえることができおり、わずか1日でも成長が見られる。 <実習7日目に、「給食の準備から給食を食べ終えるまで」の指導案を作成> 環境構成（特に、配膳台や保育者の位置）が書かれておらず、園の先生から指摘を受けて簡潔ではあるが後に記入。また、配膳中や食べている時の援助や言葉がけが記入されておらず、園の先生からの助言を受けている。 <実習8日目に、7日目と同様に「給食の準備から給食を食べ終えるまで」の指導案を作成> 前日の先生からの助言を参考にして、配膳中や食事時の言葉がけを工夫して記入している。また、ねらいについても、この時間にふさわしいものが書かれている。 <実習12日目（最終日）に、製作活動（紙コップを使った風車作り）の指導案を作成> 製作から出来上がった物を使って遊戯室で廻して遊ぶところまでの指導案を書いている。よって、ねらいも、製作と遊びの両方についての記述がされていることを評価したい。 予想される子どもの姿も、様々な子どもの様子についての想定がされていた。</p>

項目 学生名	①保育課程、 教育課程の 意義	②評価の意義 についての 理解	③保育の観察 と記録	④指導計画の 作成	⑤指導計画の 実践と評価	合計
A子	4	4	3	3	3	17
B子	3	3	3	3	3	15
C子	3	4	4	4	3	18
D子	4	3	4	4	3	18

図 1 学習目標到達度自己評価表の結果

<項目>

- ①保育課程、教育課程及び様々な指導計画の意義について理解する。
- ②計画、実践、省察、評価、改善の過程の循環による評価の意義について理解する。
- ③保育を観察し、記録を取ることができる。
- ④指導計画の作成ができる。
- ⑤指導計画を実践し、省察、評価、改善することができる。

<評価基準>

(5:理解できた 4:ある程度理解できた 3:まあまあ理解できた 2:あまり理解できなかった
1:理解できなかった)

表 4 授業を振り返っての反省と評価 (抽出学生 4 名、自由記述)

学生名	自分の目標	授業を振り返って (反省と評価)
A子	指導案の書き方を身に付ける	・指導計画や評価の意義については理解できた。指導計画の作成では、細かい部分や配慮ができなかった。また、保育の実践についても、計画した通りうまく進めることができなかった。
B子	年齢に合った指導案が上手に書けるようになりたい	・実習記録を毎日書く中で、書いていて難しい部分があった。特に、「環境構成」と「保育者の援助と配慮」で、どちらの欄に書いてよいのか迷った。
C子	指導計画の書き方を身に付ける	・保育課程と教育課程については少し理解することができたと思う。指導計画の作成では、実習で初めて書くことができるようになり、年齢にあったものを考えられるようになったと思う。
D子	実習の時の指導計画案を書けるようにする	・指導計画をどのように書くのか自分なりに分かった。記録では、言葉の使い方を直すところもあったが、分かりやすく書くことができるようになったと思う。

基礎学力の部分を底上げしていくことが前提として必要であった。

そこで、本授業において、毎回授業の最初に、各20問の漢字テストを実施し、基礎学力を定着するための試みを行った。

(2) 実習記録、指導案の作成のための取り組み

学生が、段階を追って実習記録、指導案が書けるようになるために、ステップ1から6までの授業目標を設定した。

次に、授業目標に対して、どのような授業内容を行い、学生への指導・教授を行ったのかと、考察についてそれぞれの実践を振り返って述べた。

これら一連の取り組みを総括し、学生が授業中に模写した実習記録や、同じく授業中に試案的に作成した指導案を分析した。その結果、学生個々が勉強に臨む姿勢や、高校卒業までに培った基礎学力の影響が大きいということであった。

(3) 抽出学生(4名)の実習記録、指導案の分析

次に、1年次の保育所実習(1年次1月に2週間実施)において、実習記録の内容が、他学生と比べておおよそ未熟であった学生4名を抽出した。

これは、この4名の実習記録、指導案の事例を挙げて分析することを目的とした。

その手順としては、4名の学生が、本授業を受講した結果、2年次の保育所実習(2年次6月に2週間実施)の実習記録と指導案の内容にどのような変化や向上がみられているのかを、1年次の保育所実習のものと比較を行った。

以上(1)から(3)について示した結果が表2である。

(4) 本授業を振り返っての抽出学生(4名)の自己評価

本授業の成果や課題を明らかにする方法として、「学習目標到達度自己評価表」を用いて、自己評価を行った。この評価表は、本授業の初回に受講者全員に配布し、この授業で身に付けてほしい力(5項目)について説明を行った。そして、各個人の本授業の目標を記入してもらった。

そして最終授業の中で、全員に5段階で自己評価を行った。抽出学生4名のものを抜粋した結果

は、図1と、表4の通りである。

図1からも分かるように、4名とも、5項目において平均値の3(まあまあ理解できた)以上にチェックを入れていたことから、本授業による自己の成果として評価していると思われる。このように、学生の自己評価は平均値を満たしているものの、表4からは、学生個々の課題がそれぞれ明らかになっている。

5. まとめと今後の課題

毎回の授業の始まり時に、漢字テストを行った取り組みについては、残念ながら本研究では成果を得ることができなかったと思われる。なぜなら、抽出学生4名は2年次の実習においても実習記録、実習指導案に誤字が見られたからである。基礎学力の定着のさらなる強化と、それらが身に付いたのかをどのような手法で評価するのかについては、今後の課題と言える。

実習記録の書き方では、抽出学生の1年次の実習記録と2年次のものを比較することにより、4名とも記述に成長が見られたことは、期待通りの結果であった。

部分指導案の作成では、2年次の実習で作成したものを分析した。それらが、本授業で筆者が学生に教えた知識や知見が反映され、生かされたものであったのかということ、今後の課題を残している者もいる。

その中で、とりわけD子は実習中に5回分の部分指導案を書いていることから分かるように、回を重ねるごとに少しずつ上達していったと思われる。このことは、現場の先生のご協力があったこそその結果であると思われる。学生たちも、学校の授業内で模擬的な指導案を立てる練習をするよりも、実習で目の前にいる子どもたちの姿をとらえて立てる指導案の方が、より実践的であるということはある。

また、抽出学生4名に共通していることは、1年次の実習記録よりは2年次のものの方がレベルアップが見られるが、実習記録においても指導案においてもまだまだ成長の余地を残していると思われるという点であろう。学生は、目の前の実習がひとまず終了したことで、達成感があるがゆえの自己評価結果であると思われるが、さらなる自

己の研鑽にむけて取り組みが求められている。実習とともに本授業が完結したことで、終わりではなく、筆者自身も実習後の学生たちの学びのあり方を模索していく必要性を感じている。

<引用文献>

- 1) 柴田智世、ト田真一郎、岡本和恵『実習への意識調査から見る実習事前・事後指導の今日的課題』日本保育学会第62回大会 発表論集
- 2) 岸本裕史『続 見える学力、見えない学力 読み、書き、計算は学力の基礎』、大月書店、2001年、p. 6
- 3) 前掲書、p. 63

<参考文献>

- 上野恭裕、大橋喜美子、浦田雅夫編著：『考え、実践する教育・保育実習』保育出版社（2011）
- 玉置哲淳、島田ミチコ監修：『幼稚園教育実習』建帛社（2010）
- 山岸道子編著：『保育所実習』ななみ書房、（2007）
- 小川清美編著：『幼稚園実習』ななみ書房、（2006）
- 陰山英男：『子供は無限に伸びる』PHP文庫（2005）
- 森上史朗、大豆生田啓友編：『幼稚園実習保育所・施設実習』ミネルヴァ書房、（2004）
- 大橋喜美子編著：『はじめての保育・教育実習』朱鷺書房、（2003）
- 岸本裕史『改訂版 見える学力、見えない学力』、大月書店、（1981）

The tentative plan measure of the lesson which aimed at improvement in basic scholarship —In order to create training record and a teaching plan—

Shibata, Tomoyo*

本稿では、学生が実習に行く際に、実習記録の書き方および実習指導案の書き方を身に付けるために、基礎学力の向上を目指した授業の試案的取り組みを報告したものである。

筆者の担当する「カリキュラム研究」の授業によって、学生たちがそのような力をどのように獲得していったのかを整理することにより、今後の学習活動にも役立てたいと考えた。また、実習記録の書き方が未熟な学生を数名抽出し、彼らの実習記録と実習指導案を事例としてまとめた。その結果、1年次に作成した実習記録、実習指導案を2年次のものと比べると、2年次に作成したものの方が明らかに成長が見られた。学生たちも、その点についてプラスに評価していた。しかし、その一方で、彼らの実習記録および実習指導案の記述の中身が、不十分な点や多くの課題を残していた。そのため、学生の自己評価と他者の評価には差があることも明らかになった。

キーワード：実習記録、指導案、基礎学力